

## 10 高齢がん体験者の悩みや負担の特徴

### この章の要点

がん治療において「高齢者」が何歳以上を指すか、明確な定義はない。

社会通念上は 65 歳以上が「高齢者」で、公的医療保険では 65 歳以上～75 歳未満を「前期高齢者」、75 歳以上を「後期高齢者」と区分している。

ところが、2010 年には、すべてのがん患者の 29%が 65 歳以上～75 歳未満で、75 歳以上が 41%を占めている。従って、がん治療において、「高齢者」の区分を 65 歳以上に置くと 7 割が「高齢者」と分類される。そこで、ここでは、75 歳以上の患者さんを対象に、「高齢がん体験者の悩みや負担の特徴」をとりあげることとする。

- 75 歳以上のがん体験者は、診断時、「不安などの心の問題」が 6 割と大きな割合を占めている。特に、75 歳未満に比べ「がんと診断された時の精神的衝撃」がより大きい可能性がある。(P.87)
- 診断時の悩みや負担の第 2 位「診断・治療」では、細分類「治療選択の迷い」と「今後の治療に関する気がかり」の悩みや負担に回答が集中していた。治療開始前の医療者の説明でわかりにくかったことで、75 歳以上の高齢者は若干であるが、治療の目的、期待される効果、手術方法などが 75 歳未満よりわかりにくいと回答する人が多く、医師などの説明を十分理解できないことが、より迷いや気がかりにつながったのではないかと考えられる。(P.87)
- 診断時以降現在までの悩みや負担では、「診断・治療」と「緩和ケア」の 2 つの大分類項目が 75 歳未満より高かった。しかし、具体的な内容をみていくと、件数が多い項目は 75 歳未満と類似していた。(P.88)
- 病気や治療の情報の集め方では、75 歳以上のがん体験者は、書籍・雑誌、インターネット、病院や製薬企業作成の冊子やパンフレット、患者・患者団体・患者支援団体などは、低い傾向がある。これは、情報を探す能力の問題や情報媒体を使った情報収集が苦手な傾向な可能性が考えられる。75 歳以上の高齢者は、病気や治療の情報は、主に、医師や看護師など医療者の説明や医療者との対話から入手していると考えられる。(P.94)

## (1) 高齢がん体験者とがん医療の背景

総務省がまとめた「我が国の高齢者のすがた」<sup>(1)</sup>では、高齢者の人口（人口推計）は、3,384万人、総人口に占める割合は26.7%と共に過去最高となっており、80歳以上人口は初めて1000万人を超え、日本の高齢者人口の割合は、主要国で最高といわれている。

がんの臨床現場でも、高齢がん患者が増加するなかで、認知障害、併存するさまざまな疾患、老老世帯や独居世帯などの社会的サポート不足の問題などさまざまな課題が存在している。そこで、今回の調査で特に75歳以上の高齢がん体験者（以下、高齢がん体験者とする）を取り上げ、高齢がん体験者が抱える悩みや負担を明らかにした。

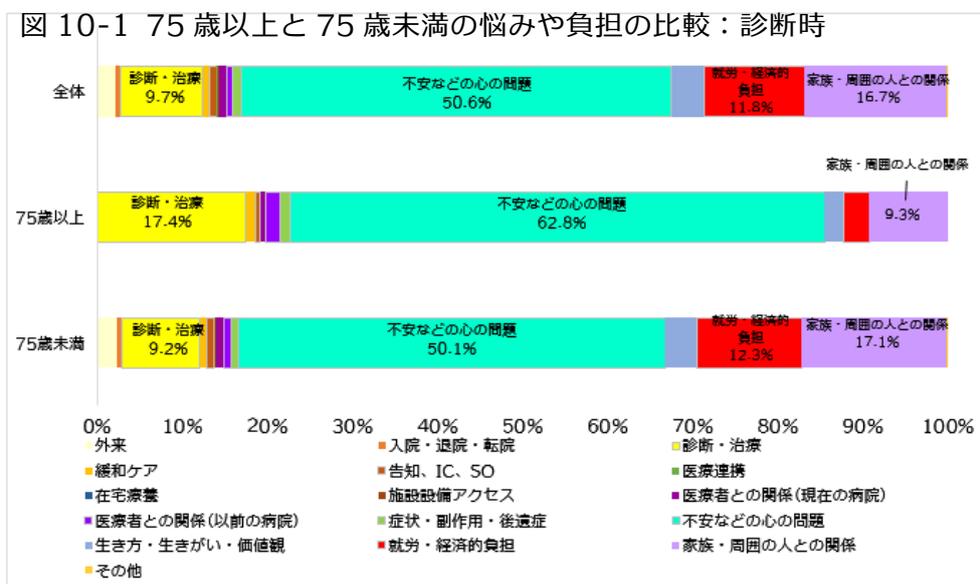
(1)総務省 統計トピックス No.90 「統計からみた我が国の高齢者（65歳以上）より  
<http://www.stat.go.jp/data/topics/topi900.htm>

## (2) 高齢がん体験者の悩みや負担

### a) 診断時

自由記述回答の悩みや負担を75歳以上と75歳未満にわけ、比較する。75歳以上では「不安などの心の問題」が全体の6割を占めている。3世代で比較したp.22の3-7でも世代が上の方が「不安などの心の問題」の割合が高い結果を示していた。このことから、高齢者は診断時「不安などの心の問題」の悩みや負担が大きいといえる。今回の調査では、75歳以上のがん体験者の診断時の悩みや負担件数は172件と全体数が少ないため本調査結果だけで断定はできないが、小分類による「精神的衝撃」が75歳未満は9.5%、75歳以上25.6%を占め、高齢者は、不安などの心の問題のなかでも特に「がんと診断されたときの衝撃」が大きい可能性がある。

また、大分類「診断・治療」も75歳未満の倍近くの割合を占めている。具体的な内容をみると、細分類「治療選択の迷い」(6.4%)と「今後の治療に関する気付き」(3.4%)の件数が多かった。この2つの項目は75歳未満でも高かったが、今回の調査では、75歳以上の大分類「診断・治療」のなかでは、この2つの項目の悩みや負担に回答が集中していた。医師から、病状や治療の説明を受けた際に、高齢者は、衝撃や動揺も強く、治療を自分で決めることへの戸惑いや未知の治療への気付きが強い傾向にあるのではないかと推測される。



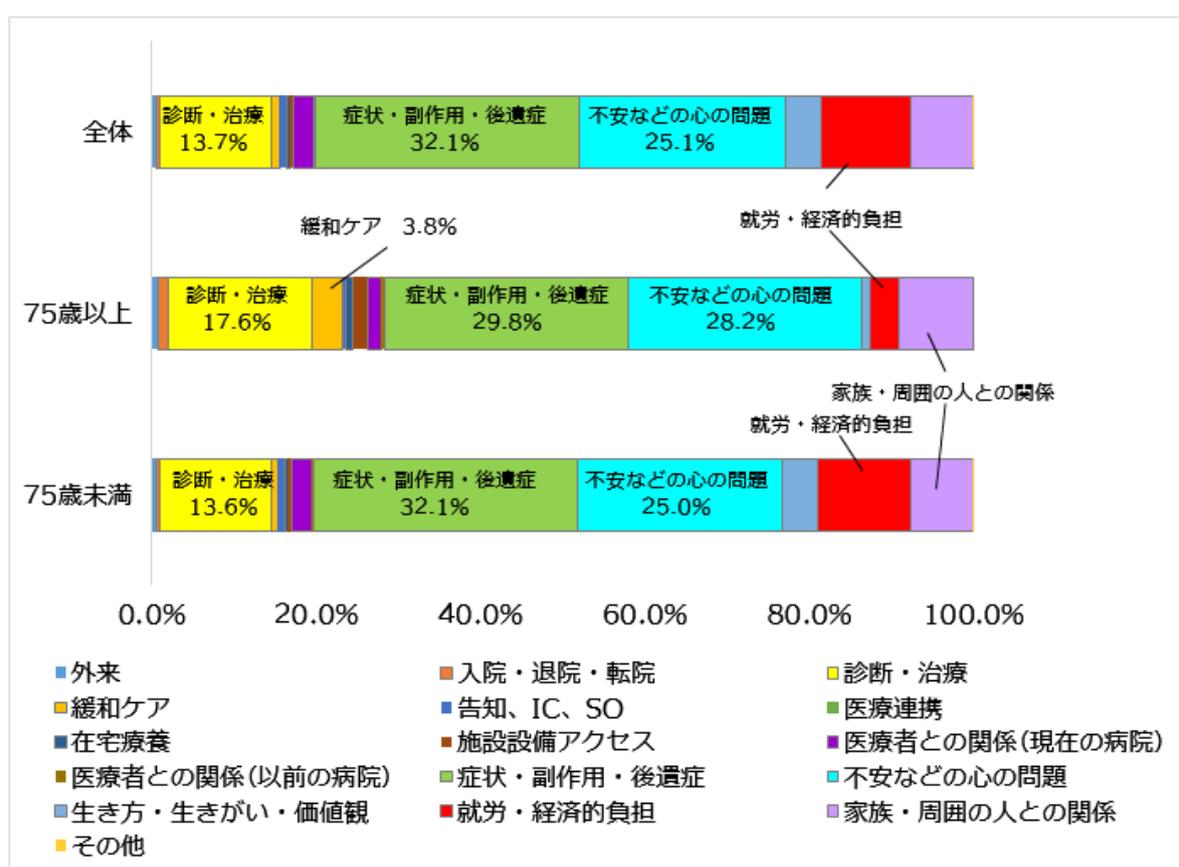
b) 診断時以降から現在まで

診断時以降も同様に 75 歳で区切り、大分類別の悩みや負担をグラフ化した。75 歳以上の悩みの件数は、262 件だった。

75 歳以上で特徴的な点は、「診断・治療」と「緩和ケア」の 2 つの大分類項目の割合が 75 歳未満より高い点である。「診断・治療」の悩みや負担を具体的にみていくと、傾向は、全体や 75 歳未満と同じであるが、「受けている治療に関する気がかり」であった。

また、大分類「緩和ケア」に関しては、75 歳未満では 0.8% であるが、75 歳以上は 3.8% である。しかし、具体的項目をみると、一部が突出して高いと言うより、全体的に悩みや負担が記述されていた。また数が多い項目も 75 歳未満と類似していた。

図 10-2 75 歳以上と 75 歳未満の悩みや負担の比較：診断時から現在



### (3) 高齢がん体験者：治療に関連した悩みや負担

#### a) 高齢がん体験者の治療状況

75歳以上の高齢がん体験者の治療状況をまとめた。

現在の治療状況は、治療継続中、治療は終了して定期的な検査通院中がほぼ同程度だった。現在までに受けた治療は、「手術」が一番多く 275 名（79.3%）である。続いて、薬物療法 178 件（51.3%）で、ほぼ半数の 75 歳以上のがん体験者は薬物療法を受けている。

なお、次ページからの治療時期別の悩みや負担と知りたかったことは、「最初の治療」に対する回答である。最初の治療は、「手術」が一番多くほぼ半数の 207 名（59.7%）で、続いて「薬物療法」80 名（23.1%）だった。

表 10-1 現在の治療状況

治療の状況	人数	%
がんに対する治療を継続中	179	(51.6%)
がんに対する治療は終了し、定期的な検査通院中	158	(45.5%)
その他	5	(1.4%)
無回答	5	(1.4%)
回答者計	347	(100.0%)

表 10-2 現在までに医療機関で受けた治療 (複数回答)

治療	実数	%
手術(内視鏡手術、胸腔鏡・腹腔鏡含む)	275	(79.3%)
薬物療法(抗がん剤・ホルモン剤・分子標的薬など)	178	(51.3%)
放射線療法	63	(18.2%)
その他	7	(2.0%)
無回答	0	—

表 10-3 最初に受けた治療

最初に受けた治療	実数	(%)
手術(内視鏡、胸腔鏡・腹腔鏡含む)	207	(59.7%)
薬物療法(抗がん剤・ホルモン剤・分子標的薬など)	80	(23.1%)
放射線療法	23	(6.6%)
その他	21	(6.1%)
無回答	16	(4.6%)
回答者計	347	(100.0%)

## b) 治療開始前の悩みや負担（気がかり）

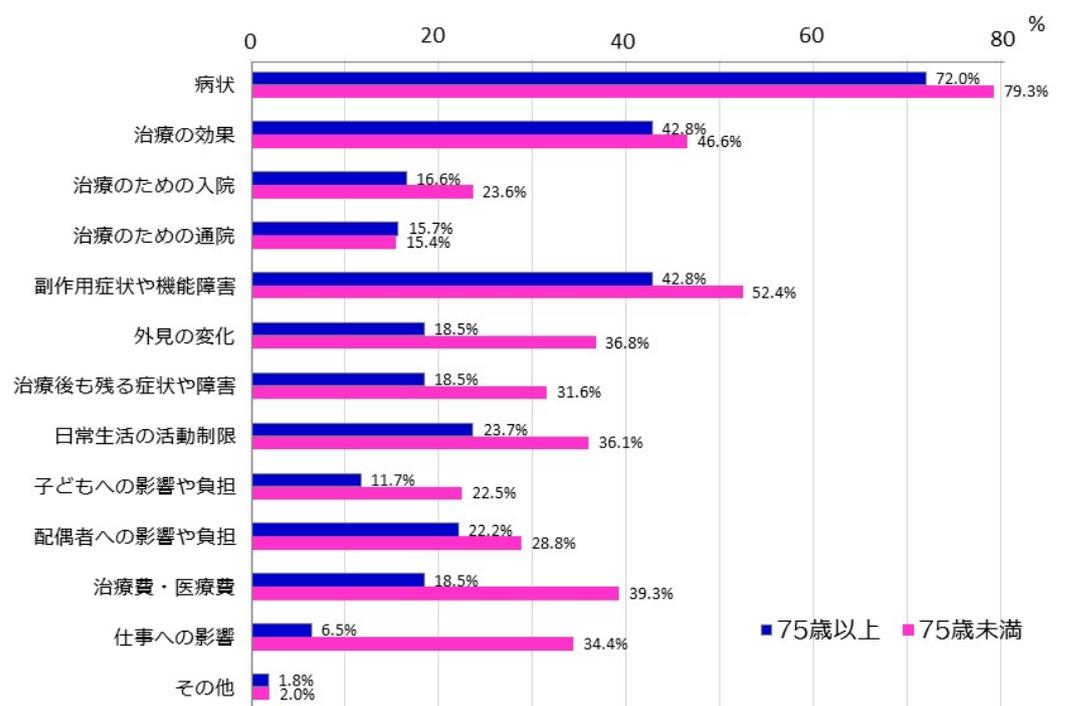
治療開始前の悩みや負担(気がかり)は、全体的に 75 歳未満より低かった。一方、相違点として、75 歳未満が高い項目は、「外見の変化」、「日常生活の活動制限」、「子どもへの影響や負担」、「治療費・医療費」、「仕事への影響」で、これらは、社会生活で果たす役割の違いから生じているのではないかと考えられる。また、この傾向は治療中の困りごとでも類似した傾向がみられる。

75 歳以上、75 歳未満とも一番困りごととして高かったのは「病状」である。75 歳以上は、第 2 位は、「治療の効果」と「副作用症状や機能障害」である。

表 10-4 治療開始前の悩みや負担：回答者数

回答状況	75 歳未満	75 歳以上
回答者	3,514 名	325 名
無回答者	126 名	22 名

図 10-3 治療開始前の悩みや負担：75 歳未満と 75 歳以上の比較



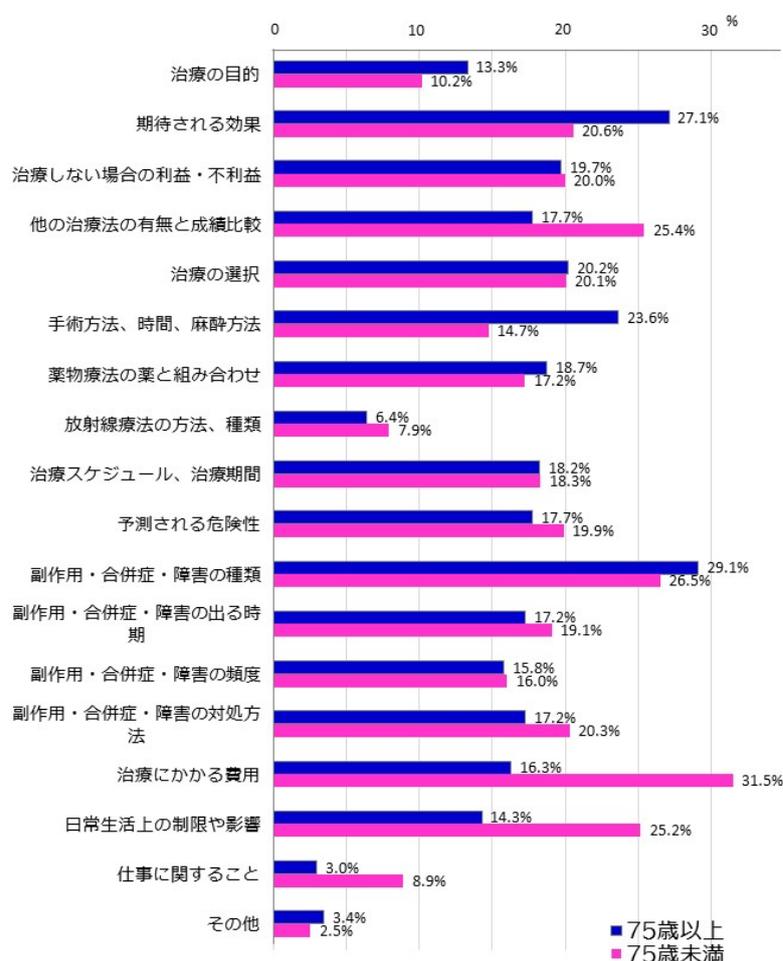
c) 治療開始前の医療者の説明でわかりにくかったこと

治療開始前の医師の説明でわかりにくかったことは、75歳以上の高齢者はわずかであるが、「治療の目的」、「期待される効果」、「手術方法など」が75歳未満よりわかりにくいと回答する人が多かった。一方、75歳未満は、「治療にかかる費用」、「日常生活上の制限や影響」、「仕事に関すること」が75歳以上に比べ高いが、これは社会生活のなかでの役割の違いによるものと思われる。

表 10-5 治療開始前の医療者の説明でわかりにくかったこと：回答者数

回答状況	75歳未満	75歳以上
回答者	2,441名	203名
無回答者	1,199名	144名

図 10-4 治療開始前の医療者の説明でわかりにくかったこと



d) 治療中の悩みや負担

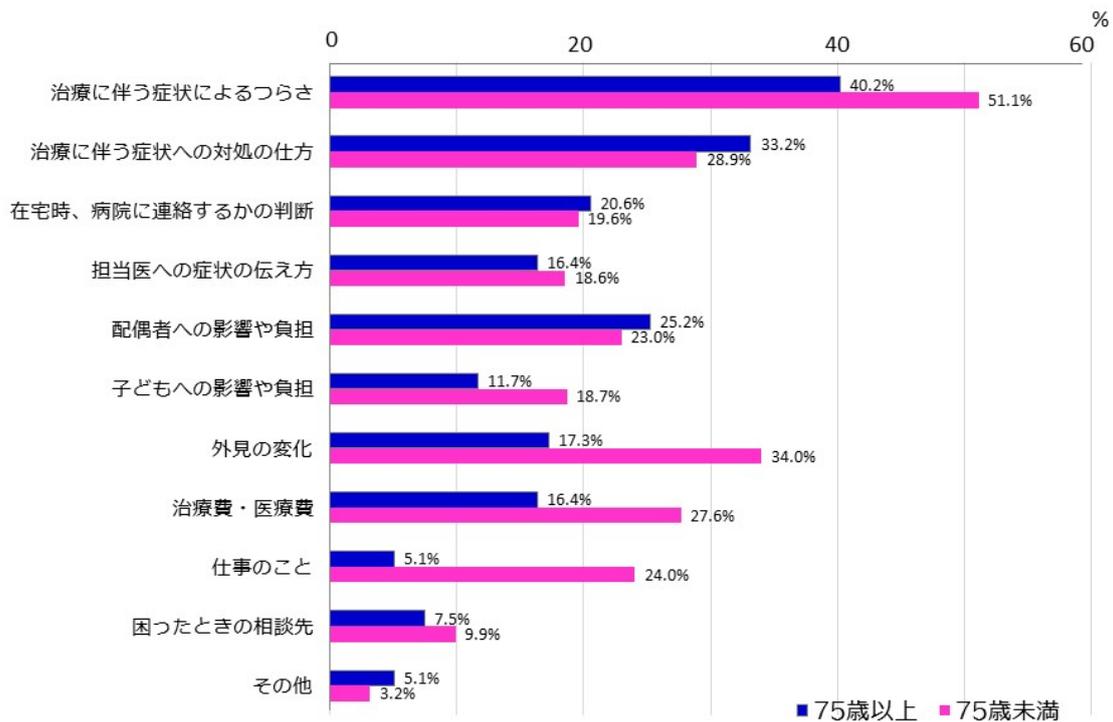
治療中の悩みや負担(困りごと)は、「治療に伴う症状への対処の仕方」が、75歳未満より若干高めである。1/3の高齢者は、治療に伴う症状への対処の仕方ですべて困っており、わかりやすい情報提供や指導、困ったときの連絡先など高齢者が安心して治療を受けられるような配慮が必要になる。全体的には、75歳未満より治療中の困りごとは低い。

家族に関しては、75歳以上は子どもも独立しているためか「子どもへの影響や負担」は11.7%と75歳未満より低かった。75歳未満は、「外見の変化」、「治療費・医療費」、「仕事のこと」などが特に75歳以上より高く、治療開始前の気がかりと同様、社会生活上の役割の違いによるものと考えられる。

表 10-6 治療中の悩みや負担:回答者数

回答状況	75歳未満	75歳以上
回答者	2,948名	214名
無回答者	692名	133名

図 10-5 治療中の悩みや負担：75歳未満と75歳以上の比較



e) 治療終了後の悩みや負担

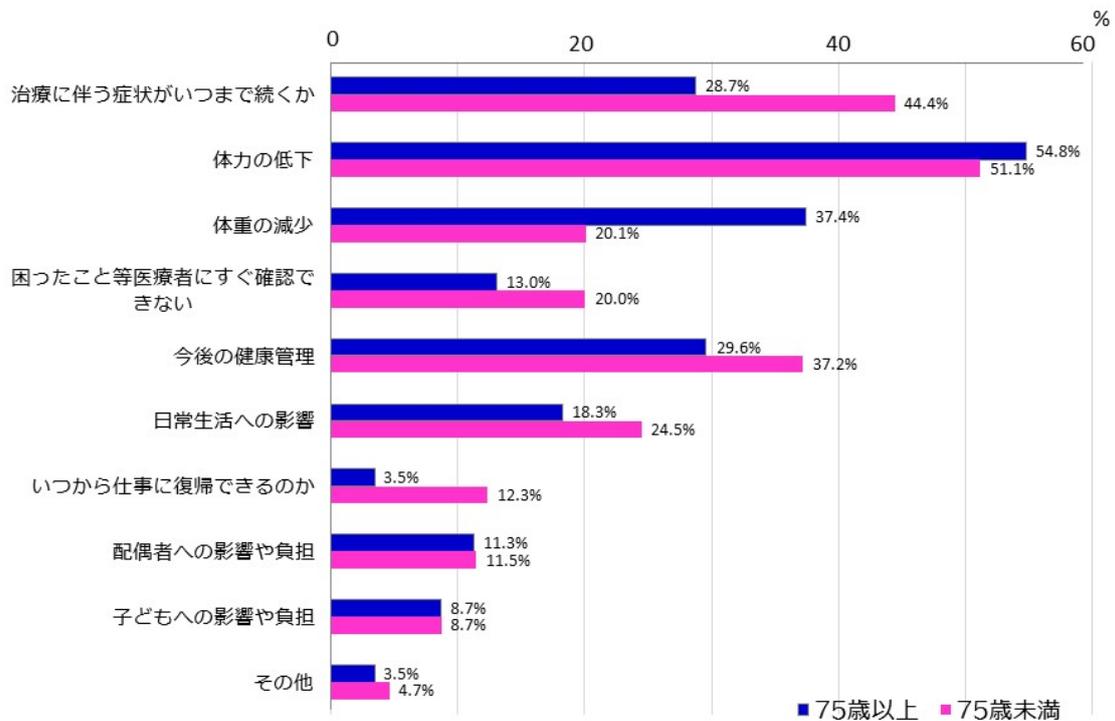
治療終了後の悩みや負担（困りごと）は、75歳未満の方が、「治療に伴う症状がいつまで続くか」が高かった。一方、「体重の減少」は75歳以上の方が高い。しかし、これは治療の種類や治療後の機能障害、年齢的な要因もあり、今回の結果だけでは断定できない。

また、75歳未満は、「今後の健康管理」や「日常生活への影響」も若干75歳以上より困りごととしてあげる人が多かった。

表 10-7 治療終了後の悩みや負担：回答者数

回答状況	75歳未満	75歳以上
回答者	1,524名	115名
無回答者	2,116名	232名

図 10-6 治療終了後の悩みや負担：75歳未満と75歳以上の比較



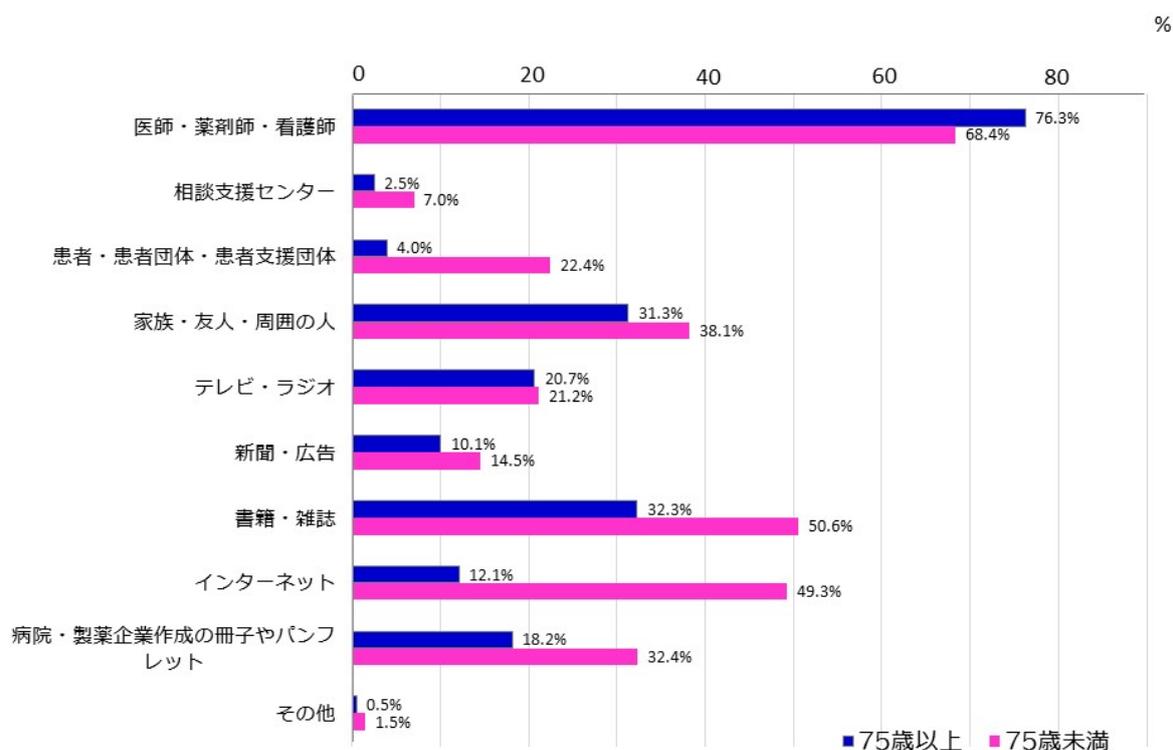
f) 病気や治療の情報の集め方

病気や治療の情報の集め方では、75歳以上のがん体験者は、書籍・雑誌、インターネット、病院や製薬企業作成の冊子やパンフレット、患者・患者団体・患者支援団体などからの情報収集は、低い傾向がある。これは、情報を探す能力の問題や情報媒体を使った情報収集が苦手な可能性が考えられる。75歳以上の高齢者は、病気や治療の情報は、主に、医師や看護師など医療者の説明や医療者との対話から入手していると考えられる。

表 10-8 病気や治療の情報の集め方：回答者数

回答状況	75歳未満	75歳以上
回答者	2,105名	198名
無回答者	1,535名	149名

図 10-7 病気や治療の情報の集め方：75歳未満と75歳以上の比較



#### (4) 病気や治療の背景

##### a) 診断時年齢

年齢	実数	(%)
75歳以上 80歳未満	238	(68.6%)
80歳以上 85歳未満	94	(27.1%)
85歳以上 90歳未満	13	(3.7%)
90歳以上	2	(0.6%)
計	347	(100.0%)

##### b) 診断後、経過年数

経過年数	実数	(%)
1年未満	198	(57.1%)
1年	66	(19.0%)
2年	30	(8.6%)
3年	15	(4.3%)
4年	15	(4.3%)
5年	5	(1.4%)
6年	5	(1.4%)
7年	5	(1.4%)
8年	2	(0.6%)
10年	3	(0.9%)
無回答	3	(0.9%)
計	347	(100.0%)

##### c) 再発転移の有無

再発・転移の有無	人数	(%)
あり	83	(23.9%)
なし	248	(71.5%)
無回答	16	(4.6%)
計	347	(100.0%)

##### d) 原発部位

原発部位	人数	(%)
咽頭・喉頭	1	(0.3%)
肺	58	(16.7%)
食道	8	(2.3%)
胃	50	(14.4%)
十二指腸・小腸	6	(1.7%)
大腸・直腸	70	(20.2%)
肝臓	16	(4.6%)
胆道・胆のう	10	(2.9%)
すい臓	13	(3.7%)
腎臓・副腎	4	(1.2%)
膀胱	8	(2.3%)
口腔・舌	2	(0.6%)
子宮	4	(1.2%)
卵巣・卵管	1	(0.3%)
乳房	27	(7.8%)
前立腺	26	(7.5%)
甲状腺	2	(0.6%)
白血病	1	(0.3%)
骨髄腫	4	(1.2%)
悪性リンパ腫	14	(4.0%)
その他	2	(0.6%)
無回答	20	(5.8%)
計	347	(100.0%)